



梅
兒
譽
美

初
編

中

時
へ遠13
839
2



門へ遠
號 139
卷 2



春色梅ある美卷之二

江戸 狂訓亭主人作

第三齣

九年身不^く世^に重^ん十年^を衣^さき^て刀^を六^六兩^の白^の名^の
渡世^の其中^にふ^る色^を知^れ集^めて一^廓盛^る久^しき^の里^に
唐^の聲^をと^り聞^えし^ると^り賑^かし^るの^り
好^むむ^む無^の節^の娘^阿長^と今^年十^六の^日
西^の規^もし^ると^り思^ふと^り思^ふと^り思^ふと^り

明治三十八年
十月十八日
購



あつちの
 大の
 国は
 うき
 袖
 八橋舎主人



唐
 此系
 米
 八
 全盛
 の
 の

あつちのうきよなもよな「アサ
 びらうきよなもよな
 私のあつちのうきよなもよな
 おおんそん思ひのサト
 のうきよなもよな
 あつちのうきよなもよな
 のうきよなもよな
 い長「あつちのうきよなもよな
 まつちのうきよなもよな
 て「あつちのうきよなもよな

さんるヨトのうきよなもよな
 あつちのうきよなもよな
 おおんそん思ひのサト
 のうきよなもよな
 あつちのうきよなもよな
 のうきよなもよな
 い長「あつちのうきよなもよな
 まつちのうきよなもよな
 て「あつちのうきよなもよな

いさゝかじりくくよ〜いざいざいざいざいざいざいざいざ
外のこころこころをわづのへ成ったし体と顔をあつめ
合やうと田中くさきお〜くらの彩造元ごらうの余
りど氣をつけてくちまをさるる。うらゝさもあきれ
たぢやうぢぎんせんり。いざいざいざいざいざいざ「私
さまがまをこけよ〜て居るんでせんじやう
すゝめそれぞとすのうまう〜」
「弟ハせんハ目頭男ごらうのひ
のゆゑのと仲がりつてゐる。やうあつてせんり〜」男

ぎんらひごう田中好ごうきんかろ志すせんりのおれ
ちこ先のおふで毛ごらうのハお替つておれ
せんハ彼奴をわづ私まをわづ。いざいざいざいざ
く〜ちやう梅ごらういざ鬼を侍ごらういざいざいざ
ね〜い内所入長ははでかちまをいざ。ト。いざいざいざいざ
あつちあつちのり人あつちのりあつちのりあつちのりあつちのり
ら〜いあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
うの中ごらうあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
かうのりあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
ち〜いあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
あ〜。丹次〜いづけのちとあつち。いざいざいざいざいざいざいざいざ

55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200

時しも菊月初の七月に夜旦満の月あり人々下りて
その春を圍て

かくをうりやましくたてがくまのいひ

あやひさめ屋うんちり入のいひ

いかにたてあやひ彼あやひけまがうまのいひ

こまのトにまをいそあまを
あやひらしくあまをいそあまを

あまをいそあまをいそあまをいそあまを

あまをいそあまをいそあまをいそあまを

二人まで僕まで世はましく中へ二人まで

二人と六五「五何サあまをいそあまを

いとそそと此ざりハ下のい

あまをいそあまをいそあまをいそあまを

あまをいそあまをいそあまをいそあまを

あまをいそあまをいそあまをいそあまを

あまをいそあまをいそあまをいそあまを

あまをいそあまをいそあまをいそあまを

澤の「サ」その合次へ入る二里合次より合次
 なる。あまの懸色は梅組も仲るの奴も息杖も
 在の舟へ入る所一場息杖もあつていひて「さ
 りひあつて」信切仲る所のいひつけあつて同乗せしむ。
 無宿のあまもあまの舟へ入る所合次渡をい
 める所のいひつけと増もあつてあまの舟へ
 入るせ入くト「さういふはあまの舟へ
 といふ寺もあつてそつて入る淋しい暮れも念仏
 誰と申すお言ひごころまで私が坊さんでいあつたといふ
 早くいひおまお念佛が「あまの舟へ入る所
 舟もあまの舟へ入る所合次渡をい
 みるあまの舟へ入る所あまの舟へ入る所
 勤るのいひごころ早くあまの舟へ入る所トいひおま
 するよ「さういふはあまの舟へ入る所
 ろりあまの舟へ入る所あまの舟へ入る所
 へ送つていひごころ早くあまの舟へ入る所トいひおま

誰と申すお言ひごころまで私が坊さんでいあつたといふ
 早くいひおまお念佛が「あまの舟へ入る所
 舟もあまの舟へ入る所合次渡をい
 みるあまの舟へ入る所あまの舟へ入る所
 勤るのいひごころ早くあまの舟へ入る所トいひおま
 するよ「さういふはあまの舟へ入る所
 ろりあまの舟へ入る所あまの舟へ入る所
 へ送つていひごころ早くあまの舟へ入る所トいひおま

おのゝちのよめる好男ハ一人も入らねばの仲る可ま
よくしつゝいへても流せら。佐業彩平のねうちあふ
たむく。一落せらるるく本堂へサテ天井おふらうのどく。
ト四人よろしくぶくとあつらへ娘のまをたれば「アエ
ぞいぞ揚及して下さふす。年もあついで高擧るを
るを悟くもあつたませらぶ。私にいさづけのお方のる
みれきへ預けらけ。毎天さる人まののして男のまよ
もさつらまひ三年の中へあつひ人よめらう運きも

一所へあつたまのころぞいぞいと尋ねあひしてと
さいやと誓ひをそと流しわづらひ。中へ私をま
ごめししてめぐさみをもるさつらの中を。どいぞ後まを
びごの年及揚及しとあはれまひ。一あるやどま
そふ園と見らるアウらうのそつら。こ年らちやくれこ安
をしてもすくさうくは十四うすは花も隠さうさうね
きしすも。
生る娘まうしそ色どけらるを執心。ハそまうく室場くの
りしや。おまう
阪まき入抄子おさうのうらふは方大はねるよま

ね人目へ無後のお娘の身の子を 賞懸るぞくハ
はす多しすこあらふとも思われね。サテ本堂へ引
たましくト。さらうらまを身を纏め。園の根も合ぬ
ふく人妻 娘 「モウくどあそけ申てきめのつお方があらる
らハあやまのりてお呉るたひヨ。後合してあみきた
とヨウリ。たまそ味とあはるたひひさしヨウリ 涙
顔よそれ露折る 俄の雲を直して明光くと照月又
んごは方ハ逢とと月ととるぎる 田南及 里外

えのまじー 荒寺のる食物すてくお入けり。三三
お娘やあぐんでよけりまをけ方があむ。どあそけ
けるお申 自はよる川でゆーのうち抱きて帰まを
あふすむ。ハそよヨクせんぎらうらま。工をもち入下補
ゆる袖をふり 掛ひお後方へ入る道まがら 娘 「アモ
ぞぞ鳩君。ておはるたひヨ。そのうらうらよここが
あふらんよりうらて来こお金か。おああの中あうら
と私けの多物もみんるあま入さん。ちよよ上まはらう。

あつらへん貴國の御麻子の肌をいじりて
しるべしとて終へんをえしものとして
ぞぞ一所は痛くはくはく後生ごうと述げ廻
るを遣はすかして悪漢どもも取是をいづくた
ゆる月の本堂へ遠慮を頼もあつて且男が
こころを連立り

そもくは娘の行のぞとて且度々等の娘お長あり
りごとくはあはれありとてくづねは彼お長え

けまがたつらひかり。そのつらとてかまは後人の
多請まの傍金をい積座敷の座をお長
かまを思ふけ。お長は道々そらさし
義孝存行往あつてうづさつと推量してお長が
銀箱辛苦を退きさせんがとめ。いせん
あつたり。忠義勝といふもの金沢の商人とあり
居る由を知り。殊に其身の怨えり合はるれば
両方へみを送りて祖作さるへ美満の時を以て遠



一人も遊ばせまじくとはなすべくもなからずしる業を
 の人邪人ままぢりまぐは遊ばせおろしお長の命を
 引であらわれゆる勇をたごさすど月夜もぞるを
 素類の志ある中年坊月夜ともは換ふさすて
 梯も世代の本様本様といひ梅甲の酒房の出
 身の旅姿「ヤクぢりまぐは遊ばせまじくはなすま
 らぬでもりよやまのいり入るま遊ばせまじくはなす
 べし」
 「なごまじくる東のまごぞころぬらやあはるもわく

梅の目もあはれくは。ヤイラあやうぐ。そく。こし
 法人あり。つれ。ヤイ身のあるまうつ。あつてよく園や
 病けなくもきくも山梅の姉にあげまの身かま風
 るまよぶまうまうまの。影をまごらあましたぬのまご
 「こまもあろりやそまごく。山梅の里の人とるり。尾の
 梅のあまごまごまご元業平のまごく。まごまご梅のあまご
 「まごまご女ごうごの梅八さぬまごゆまのらろの
 女ごうご「まごまごくあまごくあまごくまごまごまご

